

自己規定要因からみた女性の独立意識

- 発達の観点から，青年期後期と成人期前期の比較 -

三 田 英 二

本研究は，複雑だと指摘される女性の自己形成を青年期後期段階と成人期前期段階を対比させることで検討することを目的として行われた。

調査対象者は，青年期後期群として，女子学生90名(平均年齢19.18歳，SD=.76，range 18-21)。成人期前期群として，女性80名(平均年齢25.12歳，SD=1.96，range22-29)である。

測定用具として，独立意識については，加藤・高木(1980)が作成した独立意識尺度を用いた。分析にあたっては三田(2003)が因子分析した結果を用いた。自己規定要因の測定は，JanisとField(1959)が作成した尺度を遠藤ら(1974)が翻訳したself-esteem inventory(SEI)の質問文を用い，その質問項目の内容が，調査対象者個人にとり重要な内容か否かを問う質問紙(SEI-B)を用いた。

この結果，内向化を深め，「個」としての自己確立を目指す自己形成のあり方だけではなく，心理構造が成熟するまでは，親を中心とした自己を包み込んでくれる存在とともに，あるいは，利用しながら成熟していくプロセスも人格発達の一つのモデルとなることが示唆された。

・問題

かつて「独立意識からみた女性の自己の発達」(三田, 2003)という研究論文を発表させていただいた。このとき, 親との関係を示す因子で不明な点が残し, その後, 独立意識を目的変数とした検討を行った(三田, 2006, 2007)。この2つの研究でも「親への依存」因子(後述)を目的変数とした分析でいずれも有意な説明変数は見いだせずにはいた。人格形成上, 親との関係は十分に考慮しなければならないことはいうまでもない。何とか糸口を見いだせないものかと思案していた。試みに, 「独立意識からみた女性の自己の発達」で用いたSEI-B(後述)で測定された「重視される自己の側面」(今後, 「自己規定要因」と改める)を説明変数として重回帰分析を行ってみたところ, 「親への依存」因子と有意な因果関係が見いだされた。これまで不明な点が残っていた女性の青年期後期段階と成人期前期段階の親子関係について, 自己規定要因から説明できるのではないかと考えた。このため本研究は, SEI-Bを改めて因子分析し, 抽出された下位因子を説明変数として独立意識との因果関係を検討することが目的となる。

本研究は, 女性の自己形成を検討する一環として行われている。発達段階として, 青年期後期段階と成人期前期段階を対象としているのは, 青年期後期段階は, 自己確立の最終段階と考えられ, 成人期前期段階は, 自己確立後に成人した最初の段階となり, この2つの段階を比較検討することは女性の自己形成過程を考える上で有効な時期の一つと考えるからである。

女性の独立意識に関しては, これまで前述のように, 性格特性(三田, 2006)とSelf-Esteem(三田, 2007)を説明変数として, 独立意識との因果関係から検討を行った。その結果, 性格特性との関連からは, 内的準拠枠が入れ替わることが示唆された。すなわち, 青年期が終了するまでは, 自分の行動が「依存的」とか「反抗的」な行動ということが意識されないが, 成人期前期段階になると, そのような「当たり前」と思っていた行動が「当たり前」の行動とは思わなくなり, 青年期までとっていた同様の行動に対して, 「依存的」とか「反抗的」な行動というように認識されるようになっていくことが推測された。Self-Esteemからは, 青年期後期段階では, 親との親和性を保ちながら, 「個」としての内面性を成熟させていることが示唆された。そして, 親は「自己対象」的に存在しているのではないかと推測した。成人期前期段階で, 前述の研究結果(三田, 2006)と同様に, 親に対して反抗しているとか, 服従しているといったことが意識されるようになり, 親は「自己対象」的な存在ではなくなっていくことが示唆された。しかし, いずれの研究においても「親への依存」因子に対して, 青年期後期段階・成人期前期段階でどの説明変数とも因果関係が見られず, 女性の自己形成過程において, 親との関係で不明な点が多く残っている。

人間は出生直後から, 養育者に依存していなければ生存はできない。乳児にとっては, 養育者に依存することは, 生得的に付与されていることで, 養育者に依存していることは意識されていない。では, 人間はいつ親に心理的な依存をしていることに気がつくのであろうか。親に心理的に依存していることが意識できるようになることが, 心理的な自立の始まりになるのではないだろうか。

Kohut, H. (1971/1994)は, 自己の発達を自己 - 自己対象の関係の発達として理論化した。自己対象とは, 「自己の重要な部分として体験される対象」(p.)という意味で,

Kohutが命名した用語である。乳児期において、乳児が不快感を示すと、養育者がその不快感を取り除いてくれる。あたかも、養育者は乳児の分身のように動き、乳児にとっては、乳児自身が動いて不快感を取り除いたように感じる。当然、そこには「依存している」という感覚はないものと推定される。

では、どの時点で、「依存している」ということを意識するようになるのだろうか。従来の理論から推論すれば、「自他の分化」がなされたときに「依存している」という感覚が芽生え始めると考えられる。Mahler, M. (1975/1981) は、「正常な自閉期」から「正常な共生期」を経て「分離・個体化期」に至り、「情緒的对象恒常性」の獲得から「核心的同一性」を形成し、自他の分化がなされ、心理的には独立した存在となり、個としての心理的な成長が始まると定式化している。

Blos, P. (佐藤(2000)を参考)は、このMahlerの分離・個体化過程を青年期に適用し、青年期を「第2の個体化」と呼んだ。それは、乳幼児期の依存と自立の葛藤が青年期に再燃し、成人期に移行するための最終的な自立心を確立するための作業となるためである。青年期は、認知能力の発達から社会意識が拡大し、成人社会の矛盾が表面的に見えてきて、親・教師などに、その矛盾点を指摘するようになるといわれる。親・教師からすれば、自分たちに反抗しているように見えるため、幼児期の第1反抗期に対して、青年期を「第2反抗期」と呼んでいる。同時にそれは、児童期まで親・教師の指示通り行動していれば、心理的に安定していたところから、内向化により、「自我の発見」を伴い、自分のことは自分自身で決めたいという欲求がわき上がり、親等と対立し、心理的に不安定になることも意味している。

しかし、青年期においても、養育者が「自己対象」的な存在であるとすれば、養育者が青年自身の欲求を満たすための行動を取らない場合、「自分の身体の一部」でありながら自分の思い通りに動かないことに対して、という意味で、欲求不満状態になることが推測される。養育者が「自己対象」的な場合の反抗現象は、従来から指摘されている前述のような「自我の発見」に伴う反抗現象ではなく、「自分の身体の一部」でありながら、自分の思い通りに動かないことに起因する欲求不満に基づく攻撃行動となる。自他の分化がなされていれば、青年自身の欲求を他者である養育者が代わりに満たしてくれた、という意味で、感謝の気持ち等が喚起されると推測される。決して、依存心がネガティブな感情であると主張しているわけではないことを断っておきたい。Fairbairn, R. (1952/1995) は、「乳児的依存の段階」から「成熟した依存の段階」への発達過程が健全な発達過程であることを指摘している。

原田(2006)は、「自己心理学において自己は「自己対象体験」の中で発達する」とした上で、「自己対象」というのは…人生最早期においては養育者のことを指すが、厳密に言えば「自己対象」は「対象」ではなく「対象」に喚起された主観的な「体験」を意味している…また、「自己対象体験」は早期母子関係の中だけでなく、生涯に渡ってその形を変えながらも必要とされ続ける…」と述べ、青年期の「自己対象体験」について実証的な検討を行っている。半構造化面接により、「自己対象関係の拡大を通じて親との自己対象関係の再構築が行われた群」、「自己対象関係の拡大の只中にいる群」、「自己対象関係の拡大が見られなかった群」の3群に分類し、青年期の自己確立・自己形成について検討した結果、「青年期の自己確立・自己形成は、自己対象関係に対する根本的な安心感や自

己対象拡大の素地となる親との自己対象関係の成立・親との関わりの中では支えられなかった自分の特性を支える存在としての親以外との自己対象関係の成立により、自己が支えられる領域が拡大することを基盤として生じることが検証された。」と述べている。このことは、青年期までは、自己対象的な存在に支えられることによって自己確立を図っていることを意味しているものと考えられる。三田(2008)は、本研究でも用いている独立意識尺度の下位因子である「親への依存」因子と「親への服従」因子を用いて、「高依存・高服従群」、「高依存・低服従群」、「低依存・高服従群」、「低依存・低服従群」の4群に分け、各群のSelf-Esteemについて検討した。その結果、青年期後期段階では各群のSelf-Esteem得点には差異がなく、成人期前期段階で「低依存・低服従群」だけが、Self-Esteem得点を有意に上昇させ、「低依存・低服従群」のSelf-Esteem得点が他の群よりも有意に高い結果を得た。このことは、青年期までは、親から心理的に自立していなくとも自立している群(「低依存・低服従群」と同程度のSelf-Esteemを維持できるが、成人期に入ると親との関係でSelf-Esteemを維持することは破綻することを意味し、発達段階に応じた親子関係の持ち方があることを示唆するものと考えられる。しかし、青年期までは親に心理的に支えらながら自己形成を進めていることも示唆し、原田(2006)の結果を支持するものでもある(成人期前期段階以降の自己形成過程、特に上述の「低依存・低服従群」以外の群の自己形成過程や親との心理的な関係等については興味深いところであるが、調査も行ってはいず、本論のテーマでもないため、ここでの検討は行わないことをお断り申し上げておきたい。)

これまでの検討結果から、青年期までの自己形成過程において、従来指摘されてきた「個」として内向化を推し進め自己確立を図る自己形成のあり方とは異なる自己形成のあり方が示唆される。別の表現をすれば、文化心理学で指摘されるような「相互独立的」に自己確立を図るのではなく、「相互協調的」に「自律」的になっていくことで、自己確立を図っていく自己形成のあり方である。

従来「重視される自己の側面」としていた自己規定要因は、個人の行動を規定する内的準拠枠と考えている。三田(2000,2001)は、「重要である」と回答した項目の自己評価得点の方が「重要ではない」と回答した項目の自己評価得点より、多くの項目で有意に高い得点を示す結果を得た。このことは、単に自己概念を測定するよりも、「重要である」か否かの回答は、他の外的変数と相関をとった場合、より高い相関値を示すことになり、自己規定要因は、十分内的準拠枠となり得ることを示しているものと考えられる。性格特性を説明変数として独立意識を検討した先の研究(三田,2006)で「…内的準拠枠が入れ替わる…」ことが示唆されている。性格特性も内的準拠枠となる概念である。「相互協調的」な自己形成のあり方をさらに検討するため、今回は、別の内的準拠枠となる概念である自己意識を説明変数として取り上げ検討する。この内的準拠枠となる自己規定要因が独立意識にどのような影響を与えているか、青年期後期段階と成人期前期段階を対比させることで、女性の自己形成過程を検討することが本研究の目的である。

．方法

1．調査対象者

本研究は、継続的に行っているものである。分析対象のデータは、この一連の分析を始めた当初（三田，2003）のものである。参考までに調査対象者について記しておく。

調査対象者は、青年期後期群として、女子学生90名（平均年齢19.18歳，SD=.76，range 18-21）。成人期前期群として、女性80名（平均年齢25.12歳，SD=1.96，range22-29）。

青年期後期群は、授業中に調査用紙を配布・回収し、成人期前期群は、郵送により配布・回収した(回収率60%)。

なお、青年期後期群・成人期前期群の両調査対象者について、プライバシー保護の観点から婚姻の有無の調査はしなかった。

2．用具

(1) 独立意識の測定

加藤・高木（1980）の独立意識尺度を用いた。分析にあたっては三田（2003；付録1参照）が因子分析した結果を用いる。第1因子「自己決断力」(項目4，5，6，7，8，9，10，35，36)，第2因子「親への依存」(項目20，21，22，23，24，25，27，33)，第3因子「展望拡散」(項目3，13，14)，第4因子「反抗期心理」(項目28，30，31，37)，第5因子「親への服従」(項目17，18，26，29，34)の5因子が抽出されている。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの5件法により回答を求め、「全く自分にあてはまる」を5点とし、順次「全く自分にあてはまらない」まで4，3，2，1点として処理を行った。理論上の得点範囲は、第1因子「自己決断力」9点から45点，第2因子「親への依存」8点から40点，第3因子「展望拡散」3点から15点，第4因子「反抗期心理」4点から20点，第5因子「親への服従」5点から25点となる。

各因子の内的整合性係数（ α ）も検討されている（三田，2003）。第1因子.850，第2因子.876，第3因子.809，第4因子.619，第5因子.680と第3因子まで良好な値を示している。

(2) 自己規定要因の測定

JanisとField(1959)が作成した尺度を遠藤ら（1974）が翻訳したself-esteem inventory(SEI)の質問文を用い、文章の長い質問項目は意味が異ならないように文章を短くし、その質問項目の内容が、調査対象者個人にとり重要な内容か否かを問う質問紙を作成した（SEI-B）。各項目に対し、調査対象者個人にとり、その質問内容が「重要である」か「重要ではない」かの2件法で回答を求め、「重要である」と回答された場合1点とし、「重要ではない」と回答された場合0点として処理した。「重要である」と回答した項目を自己規定する項目とした。

今回調査で得られたデータで因子分析を行った。青年期後期群・成人期前期群併せて全体で因子分析し、主成分分析のうえバリマックス回転を行った。初期の固有値1.0以上で7因子が抽出された。しかし、因子の解釈において困難な因子があり、抽出因子数を6因子から2因子まで順次因子分析を行った。結局、固有値間の開きの程度、因子の解釈可能

性，重複項目などを考慮し5因子を抽出し，絶対値.5以上の負荷量を示した項目を各因子の解釈の対象とした。5個の因子は全分散の48.5%を説明するものであった。回転後の各項目への因子負荷量等をTable 1に示す。

Table 1 SEI-Bの因子分析結果

		共通性
22. 友達や知り合いの中に，あなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えると，そのことが心配でならない。	.755 .235 .007 .002 .005	.633
23. 他人があなたのことをどのように考えているか気になる。	.694 .009 .137 .101 .181	.551
19. 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて，気になる。	.669 -.001 -.097 .224 .112	.520
21. 自分の意見に同意しない人々を説得している場合，自分が相手にどのような印象を与えているか，気になる。	.571 .155 -.002 -.168 -.489	.618
12. 人前を気にしたり，はにかみをおぼえる。	.000 .735 .106 .134 .116	.584
13. クラスや自分と同年輩の人々のグループの前で話すとき，心配したり，不安になる。	.158 .617 .006 -.102 .009	.428
11. 他の人々がすでに集って話し合っている部屋に，自分一人で入っていくような場台に，気兼ねや不安をおぼえる。	.152 .600 -.008 .008 .317	.496
14. 他の人々が見ている所で，ゲームやスポーツをやっており，それにぜひ勝とうと思っている場合に，とり乱したり，まごついたり(あがったり)する。	.004 .582 .125 .247 -.242	.476
6. 自己嫌悪をおぼえる(自分で自分がいやになる)	.101 .008 .710 .199 .004	.562
5. あなたが，自分について落胆するあまり，何が一体価値あるものだろうと，疑いをおぼえる。	.129 -.003 .674 .003 -.273	.549
8. 自分には，うまくやれることなど全然ないといった気持ちになる。	.006 .010 .621 -.005 .004	.403
2. 自分が価値ある人間であるか。	.005 .007 .543 .364 .108	.446
10. あなたの仕事ぶりや，成績を審査する立場に	.222 .221 .005 .633 -.001	.502

ある人の批評が気になる。 9. 自分が他の人々と、どのくらいやっていけるかを気にする。	.230	.372	.153	.572	.113	.555
3. 自分の知ってる人々が、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくる。	.001	-.008	.109	.556	.010	.338
18. 初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話しをするのがむずかしい。	.147	.293	.118	.002	.766	.709
16. 人と一緒にいるとき、どんなことを話題にしたらよいか困る。	.285	.218	.228	.290	.535	.551
1. あなたの知っている大部分の人々に比べて、自分の方が劣っている。	.401	.010	.362	.005	.265	.374
4. 自分の過誤（ミス）は自分のせいだと感じる。	-.006	.004	.489	.003	.184	.278
7. あなたが、自分のいろいろの能力について、自信をもてるか。	-.310	.225	.166	.177	-.273	.278
15. 他の人々から、優等生とみられているか、あるいは劣等生とみられているか、気になる。	.498	.147	-.001	.367	-.150	.427
17. 「とんでもないミスや、ばかにされるような大失敗をしでかしたときのことが、気になる。	.378	.424	.004	.108	.264	.406
20. 恥かしくてどうにもならないと思う。	.121	.395	.383	-.377	-.003	.461
二乗和 寄与率 (%)	4.86	1.88	1.66	1.43	1.32	
	21.2	8.2	7.2	6.2	5.7	
	.704	.632	.639	.525	.637	

(3) SEI-Bの因子命名

第1因子は全分散の21.1%を説明するもので、他者からどのように評価されているか気になるといった項目（項目19, 21, 22, 23）で占められた。前回筆者が行った因子分析結果（三田, 1984）から項目9と10が抜けたものであった。前回同様「他者評価」と命名する。

第2因子は全分散の8.2%を説明するもので、社会的場面・対人場面での否定的な自己意識を示す項目（項目11, 12, 13, 14）が負荷した。この因子も前回分析から項目18と20が抜け落ちたものである。前は「社会的自己」と命名したが、否定的内容を明確にするため今回は「否定的社会的自己意識」と命名する。

第3因子は全分散の7.2%を説明するものであった。前回分析時に「肯定的自己価値」因子に入った項目2と「否定的自己価値」因子に入った項目5, 6が同じ因子に入った。また、前回分析でどの因子にも入らなかった項目8の4項目から構成された。項目5, 6, 8は否定的な意味合いである。そこに前回「肯定的自己価値」因子に入った項目2は、前

回と意味合いを異にし、「自分に価値があるかどうか不安である」という意味合いが強くなっているためにこの因子に含まれたものと思われる。「自己価値への不安」と命名する。

第4因子は全分散の6.2%を説明するものであった。この因子に含まれる項目は、現状の自分の能力に対する不安(項目9,10)と将来的には成功するといった自負心(項目3)といった内容である。将来的には尊敬されるといった自負心は、現状では、まだ努力が不足しているなど現状の能力に対する不安の裏返しの変現と考えられる。「自己能力への不安」と命名する。

第5因子は全分散の5.7%を説明するものであった。この因子に含まれるのは前回分析での第6因子「コミュニケーション」と同一である。会話場面での不安を示す項目(項目16,18)であった。前回同様「コミュニケーション」と命名する。

前回の因子分析と比較すると、内面的な自己認知を示す因子が、肯定-否定の軸で分かれず、否定的な自己意識に対する不安を示す2つの因子が抽出された。しかし、外面的な自己認知の側面では、概ね、前回分析と同様の結果が得られた。結局、今回分析では、肯定的な自己認知を示す因子が抽出されず、否定的な自己認知を示す因子で占められた。内的整合性係数()は全般的に低く、留保付きの尺度と考えたい。

・結果

独立意識尺度で抽出されている5因子を目的変数とし、SEI-Bで抽出されている5因子を説明変数として、重回帰分析を行った。

Table 2 に青年期後期群の重回帰分析結果を、Table 3 に成人期前期群の重回帰分析結果を示す。

青年期後期群(Table 2)では、目的変数「反抗期心理」因子の重相関係数が有意ではなかった($F(5,80)=1.03, n.s.$)だけで、他の4つの目的変数で重相関係数が有意となった。

目的変数「自己決断力」因子($F(5,81)=5.49, p<.001$)で標準偏回帰係数が有意となった説明変数は、「他者評価」因子($t=-2.41, p<.05$)と説明変数「否定的社会的自己意識」因子($t=-2.22, p<.05$)であった。これは、他者からの評価を重要視しないことや社会的な場面で自意識過剰にならないことが、自己決断力を高めていることを意味している。目的変数「親への依存」因子($F(5,81)=2.68, p<.05$)では、説明変数「否定的社会的自己意識」因子($t=2.36, p<.05$)で標準偏回帰係数が有意となった。このことは、社会的場面で自分がどのようにみられているかということを重要視し、自意識過剰になることが親への依存心を高めることを意味している。目的変数「展望拡散」因子($F(5,81)=3.72, p<.005$)では、説明変数「コミュニケーション」因子($t=2.42, p<.05$)で標準偏回帰係数が有意となった。このことは、将来への展望が拡散してしまうのは、会話場面での不安を重要視することに起因していることを意味している。目的変数「親への服従」因子($F(5,81)=5.47, p<.001$)では、説明変数「自己価値への不安」因子($t=2.29, p<.05$)と説明変数「自己能力への不安」因子($t=2.45, p<.05$)の標準偏回帰係数が有意となった。このことは、自分の内面的な価値や能力への不安が親への服従心を高めることを意味している。

Table 2 重回帰分析結果 (青年期後期群)

	自己決断力	親への依存	展望拡散	反抗期心理	親への服従
他者評価	-.258*	-.115	.029		.212
否定的社会的自己意識	-.230*	.262*	.206		.009
自己価値への不安	.018	.158	.145		.235*
自己能力への不安	-.169	.179	-.105		.279*
コミュニケーション	-.069	-.068	.276*		-.044
重相関係数	.503****	.377*	.432***	.246	.502****
決定係数	.253	.142	.187	.061	.252

*...p<.05, **...p<.01, ***...p<.005, ****...p<.001

成人期前期群 (Table 3) では, 重相関係数が有意となった目的変数は, 「自己決断力」因子 ($F(5,72)=3.35, p<.01$) と「展望拡散」因子 ($F(5,72)=2.46, p<.05$), そして「親への服従」因子 ($F(5,72)=2.72, p<.05$) であった。目的変数「自己決断力」因子で有意な標準偏回帰係数は, 説明変数「否定的社会的自己意識」因子 ($t=-2.09, p<.05$) で, これは社会的場面でどのように見られているかを気にしないことが自己決断力を高めることを意味している。目的変数「展望拡散」因子では, 説明変数「自己価値への不安」因子で標準偏回帰係数が有意 ($t=2.22, p<.05$) となった。これは, 自己価値への不安が高まることで将来展望を拡散させてしまうことを意味している。目的変数「親への服従」因子では, 目的変数「自己決断力」因子同様, 説明変数「否定的社会的自己意識」因子が有意な予測因子 ($t=2.46, p<.05$) となったが, 目的変数「自己決断力」因子では負の予測因子となったが, この目的変数「親への服従」因子では, 逆に正の予測因子となった。このことは, 社会的・対人関係場面で自分がどのように見られているか, ということをも重要視することが, 親への服従心を高める結果となることを意味している。

Table 3 重回帰分析結果 (成人期前期群)

	自己決断力	親への依存	展望拡散	反抗期心理	親への服従
他者評価	-.167		.012		.113
否定的社会的自己意識	-.282*		.219		.338*
自己価値への不安	-.016		.268*		.000
自己能力への不安	.109		-.111		-.018
コミュニケーション	-.174		.113		.034
重相関係数	.434**	.366	.382*	.369	.398*
決定係数	.189	.134	.146	.136	.159

*...p<.05, **...p<.01

・考察

目的変数（独立意識尺度の各下位因子）は、同一性形成に関連する因子、親子関係（対人関係）に関連する因子、双方に重複する因子に分かれていると考えている。すなわち、同一性関連の因子としては「自己決断力」と「展望拡散」の2因子、親子関係関連の因子としては「親への依存」と「親への服従」の2因子、双方に関連する因子として「反抗期心理」である。また、説明変数として用いたSEI-Bは、前述のように、外面的で否定的な自己認知を示す因子として「他者評価」、「否定的社会的自己意識」、「コミュニケーション」の3因子で、内面的で否定的な自己認知を示す因子として「自己価値への不安」と「自己能力への不安」の2因子である。この前提に基づき考察を進めていきたいと考えている。

また、前述の通り本研究は、女性の独立意識に関する継続研究である。これまで、女性の独立意識を検討するにあたり、性格特性（2006）とSelf-Esteem（2007）を説明変数として検討してきた。その結果、両者とも目的変数「親への依存」因子で、青年期後期群・成人期前期群とも重相関係数は有意とはならず、自己確立する発達段階と考えられる青年期後期・成人期前期での「親への依存」に関して不明な点が多かった。今回の分析で、成人期前期群では、以前の分析同様目的変数「親への依存」因子の重相関係数は有意ではなかったが、青年期後期群で、目的変数「親への依存」因子で、重相関係数が有意となった（Table 2）。まずは、親子関係に関連することから考察を始めていきたいと思う。

青年期後期段階での目的変数「親への依存」因子の予測因となったのは、説明変数「否定的社会的自己意識」であった。「否定的社会的自己意識」因子は、社会的場面での自分の振る舞いに対して自信がなく不安になるという項目からなり、いわば、他者からみられていることへの不安という意味で、エリクソン理論の早期幼児期の心理社会的危機の「自律性vs. 恥、疑惑」の発達の所産である「自己確信vs. 自己同一性の意識過剰」の失調的な素因である「自己同一性の意識過剰」に相当するものと考えられる。社会性が未成熟のため、自意識過剰となることが原因となって親に依存するということになる。健全な力が働けば、同調的素因である「自己確信」に変化していく可能性を含んでいる。しかし、成人期前期群では、目的変数「親への依存」因子は重相関係数が有意とはならなかった。

成人期前期群では同一の説明変数（「否定的社会的自己意識」因子）が目的変数「親への服従」因子の有意な予測因となった（Table 3）。同じように自意識過剰になったときに発達段階の違いにより、親との関係の持ち方が異なった。「服従」というのは、成人期前期段階では、自己確立の結果として、親を「他者」として認識できるようになり、自分との比較から、親を成熟した心理構造をもっている「他者」として、「自己確信」できないときに「服従」するのではないだろうか。

青年期後期段階では、自己の延長上にある「自己対象」的な存在であるから、まだ親を「他者」として認識していないために「依存」との因果関係が認められ、成人期前期段階では親を「他者」として認識しているから「服従」との因果関係が成立したと考えられる。

青年期後期群の目的変数「親への服従」因子では、「自己価値への不安」因子と「自己能力への不安」因子の2つの説明変数が有意な予測因となった。これは、自己の内面がまだ未成熟のときには親の指示に従うことを意味している。親には「自己対象」として、社会との間の緩衝器としての役割を演じてもらい、その間に自己の成熟を図るため、このような結果が現れていると考えられる。

Kohut, H. (1977/1995) は「正常な環境のもとでは、子どもの心理平衡が乱されると、その緊張感は自己-対象によって共感的に感知され、反応される。子供の欲求を現実的に評価し、それに対して何をすべきかを現実的に認識できる成熟した心理組織を備えた自己-対象は、子供を自分の心理組織のなかに包み込み、そして子供の恒常性の不均衡を改善するように行動するだろう。」(p.67) と述べている。

もちろんこの記述は乳幼児期の子どもについての記述であるが、青年期段階まで親が「自己対象」的に存在しているのであれば、まだ成熟していない青年の心理構造を包み込むために親が青年に代わって対処行動を考えることは推測される。あるいは、青年自身がそれを必要としているのかもしれない。親との心理的な距離とSelf-Esteemの関係を検討した結果(三田, 2008)において、青年期後期段階では、親との心理的な距離にかかわらず、Self-Esteem得点には差異がなかった。Self-Esteemは内的適応度を測る一つの指標でもある。「否定的社会的自己意識」因子は、対人領域場面での自己意識を示すため外面的な自己認知を示す因子ではあるが、基本的には、自己の内面的な資質・能力に確信が持てず、他者からの評価等が気になるため、重要視すると考えられる因子である。前述のように、青年期段階までは、自己の資質・能力を成熟させるため親を社会との間の緩衝器として利用していると考えられる。

目的変数「反抗期心理」因子は、「自我の発見」から親・教師など成人に対して自己主張を行うといった意味を持つ因子である。この因子に対して、青年期後期群は、今回だけでなく、性格特性(三田, 2006)とSelf-Esteem(三田, 2007)を説明変数としたときにも因果関係が見られた説明変数はなかった。「反抗期心理」因子と自己規定要因に因果関係が認められない今回の結果も含め、これらのことは、「自我の発見」に伴う親等への反発で自己確立を目指しているわけではないことを意味しているものと思われる。成人社会への反発・反抗といった意味で考えていけば、自己と他者が対立するような意味を持つ因子と何らかの因果関係を持って不思議ではないと考える。しかし、前述のように、青年期後期段階では因果関係を持つ説明変数は見られなかった。

成人期前期段階では、YG検査を用いて性格特性(2006)を説明変数としたときには、「攻撃的」が正の予測因となり、Self-Esteem(2007)を説明変数としたときには、自己矮小感が強いことが「反抗期心理」の原因として見いだされた。今回の分析では、有意な予測因は見いだされていない(Table 3)。これらのことは、自己肯定感が強く他者と対立した結果「反抗」するのではなく、心理的に「落ち込んでいる」とき、心理的なバランスを回復させるために「攻撃的」になると推測できる。そして、成人期前期段階では、青年期後期段階とは異なり、親を心理的に近い「他者」として「甘える」対象と認識できるようになったため、「反抗期心理」と因果関係を持ったのではないだろうか。

青年期後期段階まで、親と自他の分化が明確にはなされていず、「自己対象」的になっていると考えれば、親は「自己の重要な部分として体験される対象」(Kohut, H., 1971/1994)であるから、親に反発・反抗する必要はなく、因果関係を持つ説明変数が見いだされないのではないだろうか。現実的に親に対して、反発・反抗するのは、前述のような「自分の身体の一部」でありながら思い通りに動かないための欲求不満に基づく攻撃行動、という考え方が支持されるのではないだろうか。

同一性形成関連の目的変数では、目的変数「自己決断力」因子において、青年期後期群

・成人期前期群とも同様な結果が得られたが、目的変数「展望拡散」因子では、青年期後期群・成人期前期群間で異なる結果が得られた（Table 2，3）。

目的変数「自己決断力」因子では、青年期後期群も成人期前期群も外面的で否定的な自己認知を重要視しないことが自己決断力を高めるという因果関係が示された。これは、女子青年の自己認知の特徴と指摘（三田，1994）したことに関連する結果と思われる。すなわち、他者から注意・非難を受けないように、自分の所作・振る舞いに気を付けるために外面的で否定的な自己の側面を重視するという自己認知様式（但し、決して自己否定しているわけではない）の結果と思われる。他者から注意・非難を受けないときに自己決断ができるということではないだろうか。Self-Esteemを説明変数としたとき（三田，2007）は、目的変数「自己決断力」因子の有意な説明変数は、青年期後期群・成人期前期群ともに「自己肯定感」因子が正の予測因であった。他者の存在を配慮しなくてもよいときに「自己決断力」が高まることを示していると思われる。また、このことは、他者との関係性を重視するという女性の自己形成上の特徴（杉村，1998）を示しているものかもしれない。

目的変数「展望拡散」は、青年期後期群では、外面的自己認知を示す説明変数「コミュニケーション」因子が有意な正の予測因となり、成人期前期群では内面的な自己認知を示す「自己価値への不安」が正の予測因となった。青年期後期段階では、対人関係場面での未熟さが自分の将来展望を拡散させる原因となるが、成人期前期段階では、自己価値に対する不安が将来展望を拡散させるということになる。青年期までは対人関係を重視するあまりに、会話場面での不安が、自分の将来展望を拡散させる結果となり、成人期段階に入ると本来の意味合いで自分の将来展望が拡散するという結果となった。このことは、自己の成熟から自己確立したことを示すサインなのかもしれない。

ところで、青年期後期群では、「親への服従」という対人関係領域の予測因となった因子が、内面的な自己認知を示す因子（「自己価値への不安」因子と「自己能力への不安」因子）であり、因果関係が外面 - 内面と交差していることが示された。同一性関連因子と考えている目的変数「自己決断力」因子においても、外面的自己認知を示す2つの説明変数（「他者評価」因子と「否定的社会的自己意識」因子）が有意な予測因となり、目的変数「展望拡散」因子では、外面的な自己認知を示す説明変数「コミュニケーション」因子が有意な予測因となり、因果関係に同様の交差が見られている。改めて因子分析を行ってはいないものの、独立意識を説明変数としたときと同一データのため当然の結果かもしれないが、女性の自己形成過程が複雑だと指摘される原因の一つではないかと指摘（三田，2003）した「因果関係の交差」がここでも認められることを一応指摘しておきたい。成人期前期群では、目的変数「自己決断力」で因果関係の交差は解消してはいないが、目的変数「展望拡散」因子の予測因となった説明変数は内面的自己認知を示す「自己価値への不安」因子であり、目的変数「親への服従」因子では、外面的自己認知を示す説明変数「否定的社会的自己意識」因子が予測因となるというように、因果関係の交差は解消していることも指摘しておく。これらのことは、「因果関係の交差」の解消が、上述のように「自己確立」のサインとなることを示唆しているものかもしれない。

また本研究は、生物学的な性に基づく研究である。本研究も含めた独立意識に関わる3つの研究から得られた知見が、そのまま女性の自己形成の特徴と主張しようとは思ってはいない。以前、青年期後期段階の女性を調査対象として、幼少時に受けたしつけの型を回

想的に回答を求め、自己認知との関係を検討した(三田, 1998)。その結果, 社会的な圧力が強いしつけが優位であった群は, 外面的で否定的な自己の側面を重視し, 自由裁量幅が広いしつけが優位であった群では, 内面的で肯定的な自己の側面を重視することが示唆された。このことは, 親の子どもへの養育態度によって自己形成過程は異なることも示唆する結果と考えられる。また, 社会的な性という観点もあり, 様々な角度から検討していくことが必要であると考え。しかし, 青年期までの自己形成過程において, 内向化を深め, 「個」としての自己確立を目指す自己形成のあり方だけではなく, 心理構造が成熟するまでは, 親を中心とした自己を包み込んでくれる存在(緩衝器)とともに, あるいは利用しながら, 成熟していくプロセスも人格発達の一つのモデルとなることを実証的なデータから示すことができたと思う。

<引用文献>

- ・遠藤辰雄(編) 1974 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- ・Fairbairn,R 1952 Psychoanalytic studies of the personality. 山口泰司(訳) 1995 人格の精神分析 講談社学術文庫
- ・原田和典 2006 青年期における自己対象関係による支えについての実証的研究 - 半構造化面接による人生のふりかえりから - 青年心理学研究, 18, 19-40.
- ・加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- ・Kohut,H. 1971 The analysis of self. 水野信義・笠原嘉(監訳) 1994 自己の分析 みすず書房
- ・Kohut,H. 1977 The restoration of the self. 本城秀次・笠原嘉(監訳) 1995 自己の修復 みすず書房
- ・Mahler,M.S. 1975 The psychological birth of the human infant. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀(訳) 1981 乳幼児の心理的誕生 黎明書房
- ・三田英二 1984 Self-Esteemに関する研究(1) - 青年期の発達的变化について - 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 10, 29-38.
- ・三田英二 1994 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究 - 女子青年を被験者として - 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 20, 1-6.
- ・三田英二 1998 女子青年の重視される自己の側面に関する研究(1) - しつけの型からの検討 - 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 11-2, 89-100.
- ・三田英二 2000 重視される自己の諸側面に対する自己評価に関する研究 - 女子青年を被験者として - 日本性格心理学会第9回大会発表論文集, 62-63.
- ・三田英二 2001 重視される自己の諸側面に対する自己評価に関する一研究(2) - 肯定的項目と否定的内容の項目の比較 - 日本性格心理学会第10回大会発表論文集, 128-129.
- ・三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達 青年心理学研究, 15, 1-15.
- ・三田英二 2006 性格特性からみた女性の独立意識(2) - 発達の観点から, 青年期後期と成人期前期の比較 - 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 19-W-9, 1-13.

- ・三田英二 2007 Self-Esteemからみた女性の独立意識 - 発達の観点から，青年期後期と成人期前期の比較 - 静岡県立大学短期大学部研究紀要，20-W-4，1-11.
- ・三田英二 2008 発達の観点からみた女性の親との心理的距離とSelf-Esteemの関係 静岡県立大学短期大学部研究紀要，20，37-48.
- ・佐藤朗子 2000 青年期の（第2の）個体化 久世敏雄・齋藤耕二（監修）青年心理学事典 福村出版 p.183.
- ・杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究，9，45-55.

付録1 独立意識尺度の因子分析結果（回転後）
（三田，2003を一部改変）

		共通性
6. 人の意見もよく聞くが，最終的には自分で決断できる。	.740 -.014 -.031 .036 -.056	.553
8. まわりの人と意見がちがっても，自分が正しいと思うことを主張できる。	.712 .046 .016 .294 -.109	.608
5. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	.699 .008 -.257 -.077 .038	.562
36. どうしたらよいのか，自分で決心できないことが多い。	-.661 .139 .276 .278 .275	.686
4. 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	.625 -.125 .026 -.135 -.059	.429
35. 他人の意見や流行に，つい引き込まれてしまう。	-.585 .049 .043 .203 .237	.443
7. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	.583 .227 -.345 .115 .108	.535
10. 自分の意見を言えずに，相手に従ってしまうことが多い。	-.570 .190 .222 -.111 .262	.491
9. 小さなことでも，自分で決断することができない。	-.519 .026 .186 .120 .216	.366
22. つらい時，悲しい時に，親のことがまず頭に浮かぶ。	-.035 .831 .051 .002 .059	.698
20. 親といるだけで何となく安心できる。	-.060 .795 .148 -.067 .021	.662
24. 親は自分の心の支えである。	.014 .786 .014 .030 .018	.620
23. できることなら，いつも両親と一緒にいたい。	-.014 .783 .026 -.056 .057	.620
21. 困った時は親に頼りたくなる。	-.141 .714 .149 .010 -.025	.553

25. 何かする時には、親にはげましてもらいたい。	-.049	.653	-.078	.260	.312	.600
33. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない。	-.143	-.645	.048	.259	.160	.531
27. 親には何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073	.543	-.086	.256	.382	.519
14. 将来、どんな職業についたらよいかわからない。	.015	.062	.857	.028	.126	.755
13. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	-.194	-.005	.758	.150	-.010	.635
3. 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324	-.121	-.687	-.023	-.159	.618
31. 両親につい反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067	.177	.064	.698	-.180	.560
30. 親や先生のいうことには、たとえ正しくても反対したくなる。	-.010	-.030	.063	.691	-.098	.492
28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	.113	-.325	.110	.575	-.031	.461
37. いつでも相手になってくれる友達がほしい。	-.290	.113	-.047	.531	.066	.385
18. 親にさからえないで、言うとおりになってしまやすい。	-.124	.025	.141	-.033	.748	.597
29. 親の言うことには素直に従っている。	.007	.295	.029	-.329	.637	.602
26. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている。	-.065	.469	.035	.153	.543	.544
34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。	-.267	-.300	.031	.213	.526	.484
17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひきめを感じることはない。	.279	.003	-.110	.037	-.517	.359
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができると思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(がまんしたり、調節したりする)ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16. 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすることには強い反発を感じる。	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261

19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	- .148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひきめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
二乗和	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83	
寄与率 (%)	20.2	13.0	7.7	5.5	4.9	
	.850	.876	.809	.619	.680	

(2008年3月31日受理)